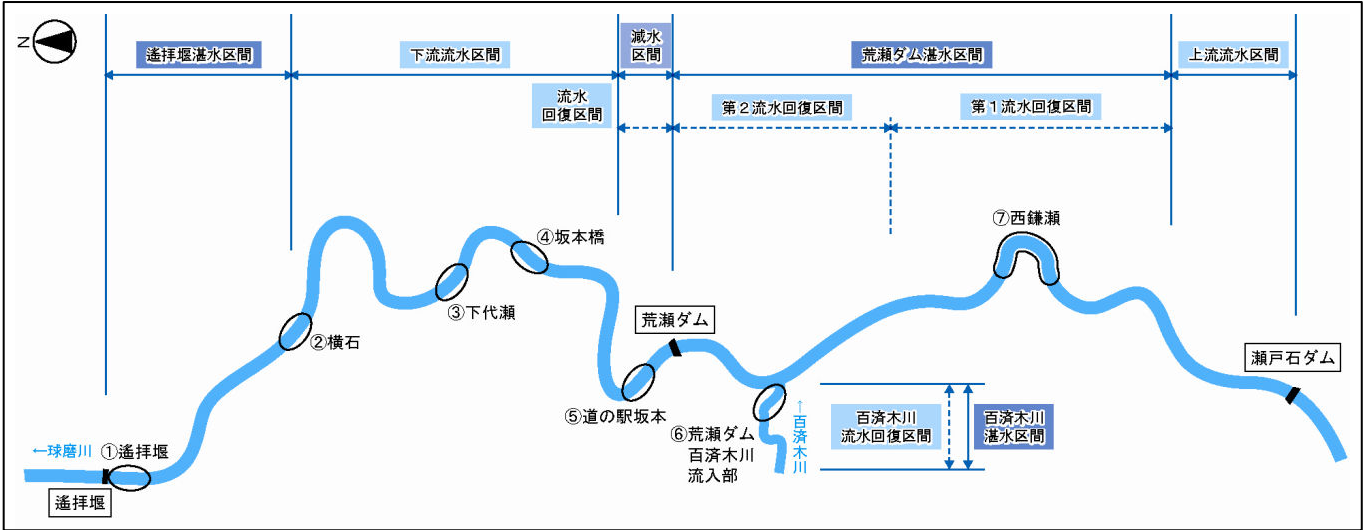


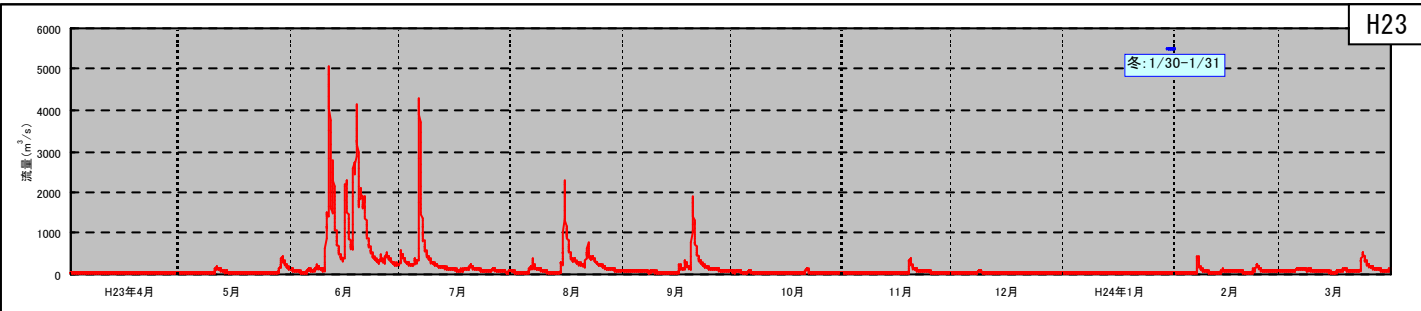
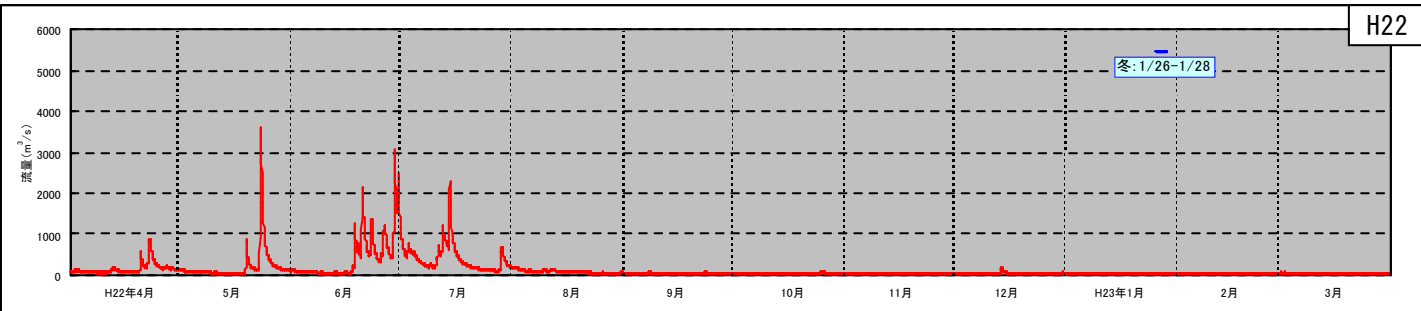
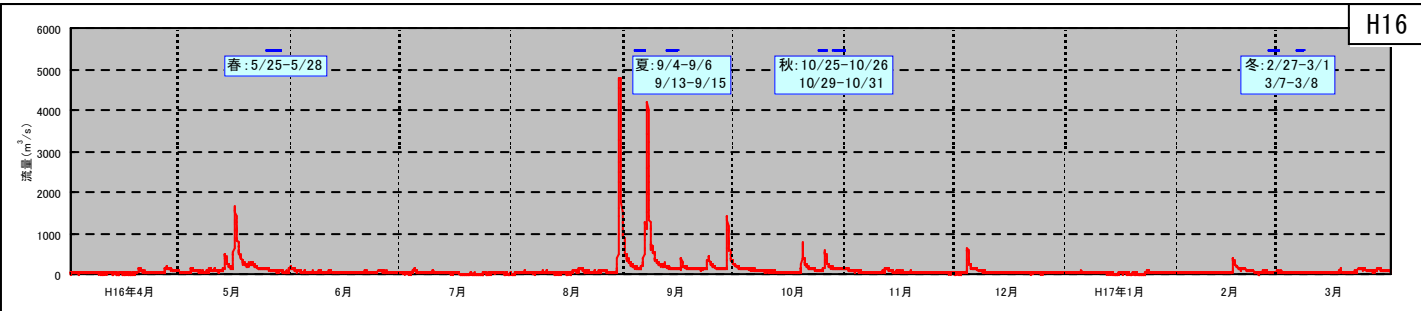
3) 底生動物

評価項目	視点	評価概要
A これまでの変化状況	全確認種数	9～74 種の範囲にあり、遙拝堰で少ない傾向にある。遙拝堰で種数が少ないのは、止水域で河岸のエコトーンが少なく、総じて環境が単調なためと考えられる。
	河岸の浅瀬に生息する種数	2～48 種の範囲にあり、遙拝堰で少ない傾向にある。遙拝堰で種数が少ないのは、水深 3～5m で深く止水域であるため。
	刈取食者の種数	0～19 種の範囲にあり、遙拝堰で少ない傾向にある。遙拝堰で種数が少ないのは、水深 3～5m で深く止水域であるため。
	流水性種の種数	2～52 種の範囲にあり、遙拝堰で少ない傾向にある。遙拝堰で種数が少ないのは、水深 3～5m で深く止水域であるため。
B ゲート開放前後の変化状況	全確認種数	遙拝堰及び坂本橋を除き、増加傾向にある。特に、百済木川流入部で増加傾向が著しい。
	河岸の浅瀬に生息する種数	遙拝堰及び坂本橋を除き、増加傾向にある。特に、百済木川流入部で増加傾向が著しい。カゲロウ目またはトビケラ目が増加の原因となっている。
	刈取食者の種数	百済木川流入部で増加傾向にある。
	流水性種の種数	遙拝堰及び坂本橋を除き、増加傾向にある。特に、百済木川流入部で増加傾向が著しい。

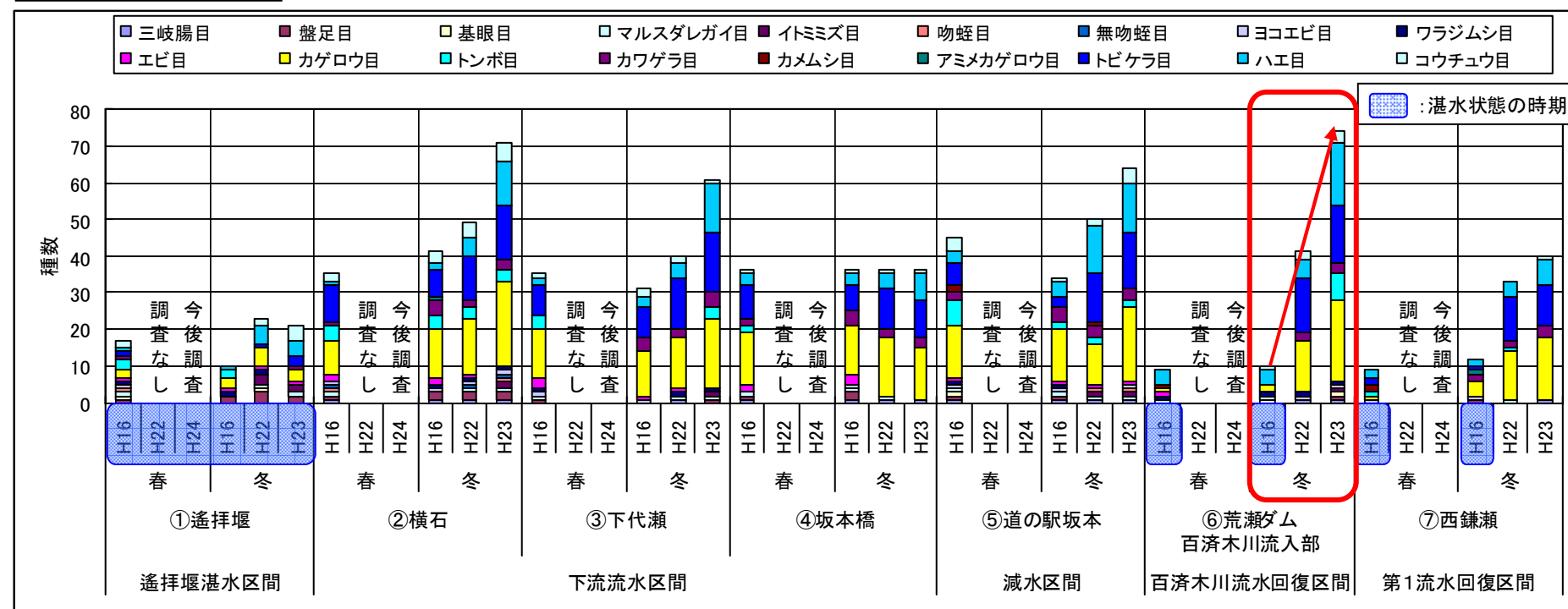
調査地点



調査時期における荒瀬ダム流量



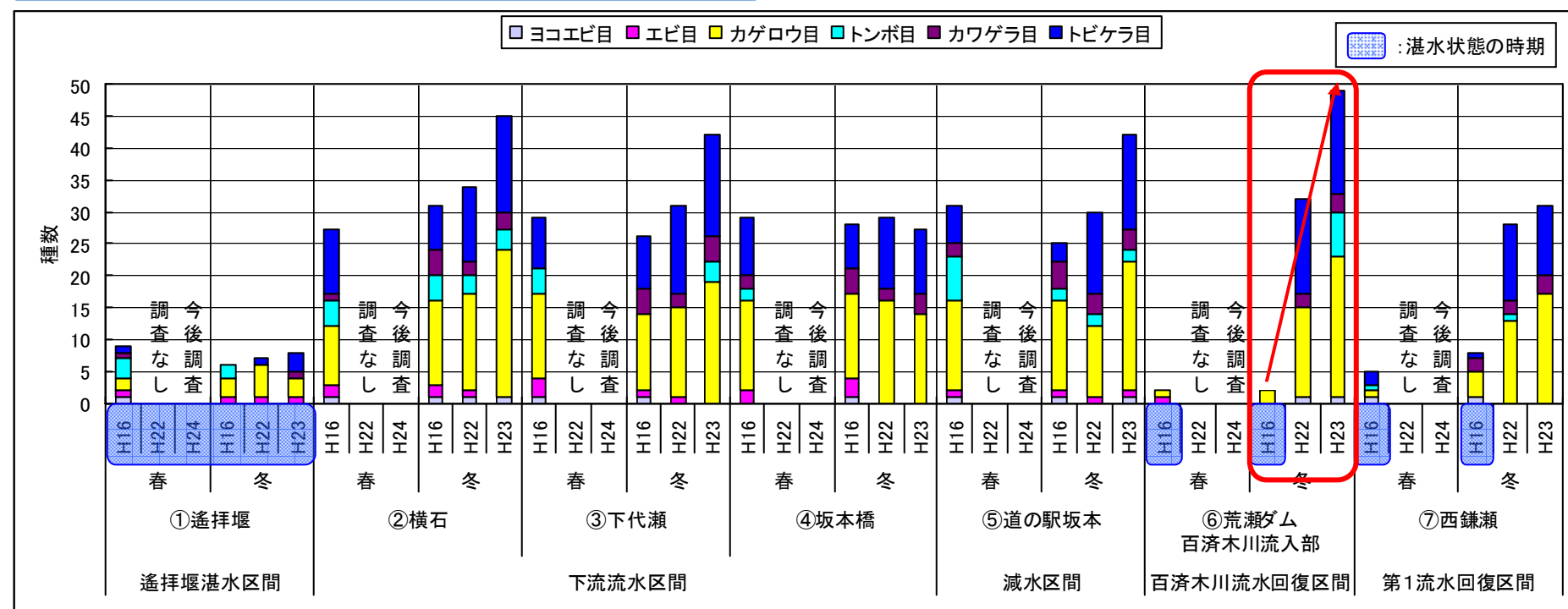
底生動物の全確認種数



【コメント】

- ・これまでの変化状況：
9～74種の範囲にある。遙拝堰で少ない傾向にあるが、止水水域で河岸のエコトーンが少なく、総じて環境が単調なため。
- ・ゲート開放前後の変化状況：
遙拝堰及び坂本橋を除き、増加傾向。特に、百済木川流入部で著しい。

河岸の浅瀬に生息する種（エビ目及びカゲロウ目等）の種数の内訳



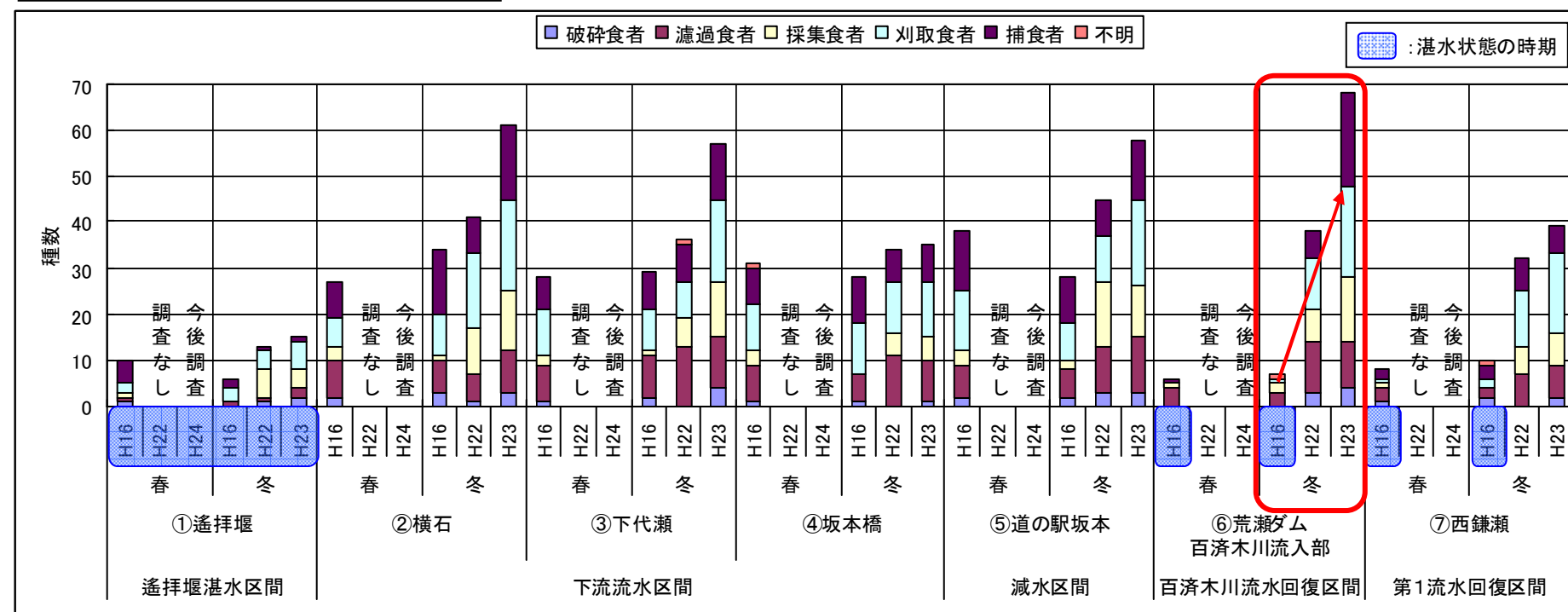
【コメント】

- ・これまでの変化状況：
2～48種の範囲にある。遙拝堰で少ない傾向にあるが、水深が深く止水水域であるため。
- ・ゲート開放前後の変化状況：
遙拝堰及び坂本橋を除き、増加傾向。特に、百済木川流入部で著しい。カゲロウ目またはトビケラ目が増加の原因。

【用語の解説】

- ・河岸の浅瀬に生息する種：流水域の植生が繁茂した河岸に生息する小型の水生動物。荒瀬ダムの撤去によってダム上流域の水位が低下して流水域となり、河岸に植生が繁茂した浅瀬が多くなると、これらの種の幼体や成体が増えると考えられる。これらは様々な魚介類や鳥類の餌となるため、河川生態系が豊かになる。ここでは、ヨコエビ目、エビ目、カゲロウ目、トンボ目、カワゲラ目、トビケラ目を挙げた。

刈取食者を含む摂食機能群別の種数の内訳



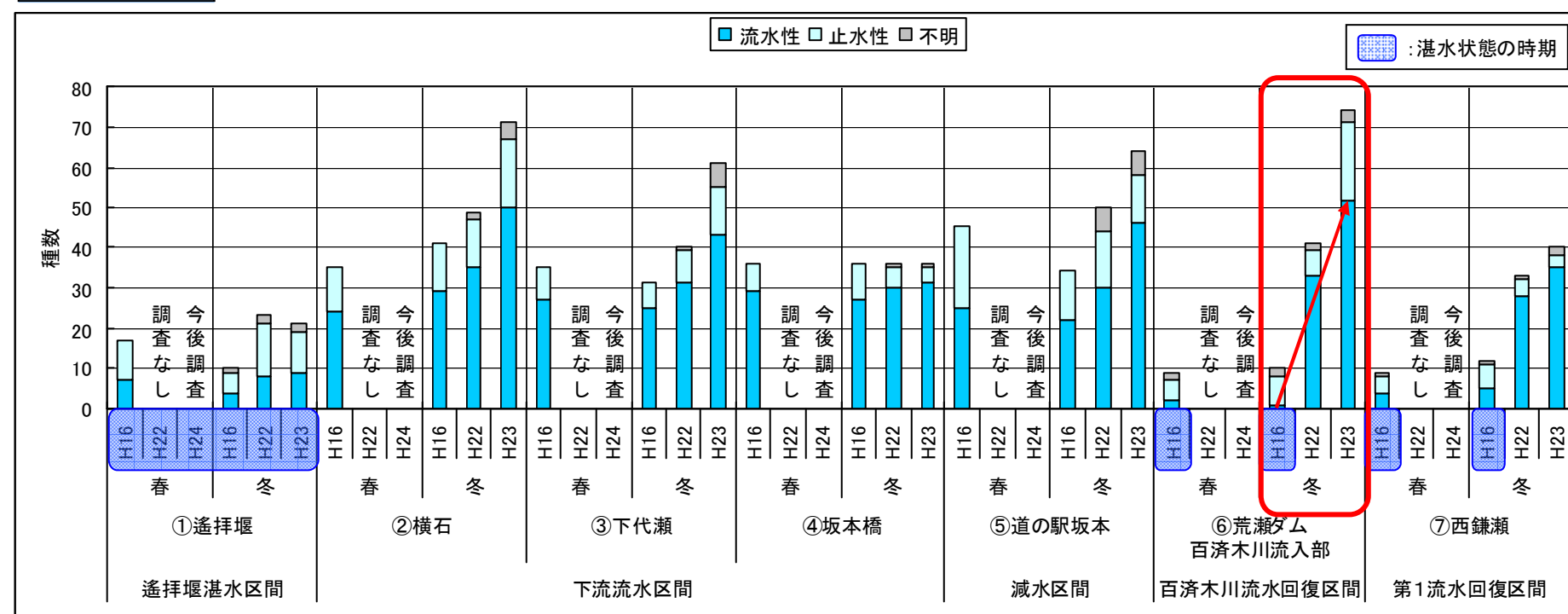
【コメント】

- ・これまでの変化状況：
0～19種の範囲にある。遙拝堰で少ない傾向にあるが、水深が深く止水域であるため。
- ・ゲート開放前後の変化状況：
百済木川流入部で増加傾向。

【用語の解説】

- ・刈取食者：石の表面に付いた付着藻類を大顎で刈り取ったり、髭で掃き取ったりして摂食する種。荒瀬ダムの撤去によってダム上流域の水位が低下し日光が河床に届くようになると付着藻類が生長し、これを摂食する刈取食者が増えると考えられる。代表例として、ヒラタカゲロウ属、タニガワカゲロウ属、コカゲロウ属、ヤマトビケラ属等に属する種が挙げられる。

流水性種の種数



【コメント】

- ・これまでの変化状況：
2～52種の範囲にある。遙拝堰で少ない傾向にあるが、水深が深く止水域であるため。
- ・ゲート開放前後の変化状況：
遙拝堰及び坂本橋を除き、増加傾向。特に、百済木川流入部で著しい。

【用語の解説】

- ・流水性種と止水性種：流水性種は、河川の瀬を主な生息場とする種。止水性種は、湖沼や水田を主な生息場とする種。荒瀬ダムの撤去によってダム上流域の水位が低下し流速が増すと、流水性種が増加し、止水性種が減少すると考えられる。代表例として、流水性種ではカゲロウ目、カワゲラ目、トビケラ目の大部分の種が、止水性種ではマキガイ綱、ミミズ綱等に含まれる種が挙げられる。